

復活節第6主日 神様は切り捨てない

今日の福音書には、有名な「イエスはまことのぶどうの木」という、ヨハネによる福音書15章の冒頭の部分が選ばれています。以前教区報の巻頭言に、このことについて書いたことがありますが、基本的なことですから先ず、この聖句について、改めて説明します。

これには、ぶどうの木であるイエス様と、枝である弟子たち、そしてそれを手入れする農夫役の父なる神様が登場します。はたして、私たちはこのたとえでは、弟子たちと同じ枝なのか、あるいは、弟子たちの枝にできる実なのか、どちらにも解釈できますが、今日は枝ということにして話します。

私は小学生の頃、聖公会には日曜学校がなかったので、近くの福音派の教会の日曜学校に行っていました。そして、「しゅイエスはまことのぶどうの木」という歌もよく歌っていました。ところが、この歌の2節目に、こんな言葉が出てきます。

「ちいさなぶどうは幹なしに、大きなふさにはなりません。育てる神様手入れして、実らぬ小枝を切り捨てる。」というものです。枝である私たちは、もし実がならないと、神様から切り捨てられるので、切り捨てられないように、実をつけなければならない、ということになる。

それで、3節目の「主イエスはまことのぶどうの木 わたしはつながる小枝です。しっかり主イエスにつながって、りっぱなぶどうになりましょう。」という結論になるのです。

そして、知らず知らずのうちに、神様というのは、父親というイメージではなく、恐ろしい予備校の先生で、いい点をとらなければならない、こわい神様、という風に考えてしまっていました。

それは、元はと言えば、このこども賛美歌73番が悪いのではなく、今日の聖書の言葉が悪い。

今日のヨハネ15章1～2節には、このような言葉が出てきます。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。」

この父である農夫、この神様は、悪いものを取り除く神様だ。イエス様は優しいけど、父なる神様は恐ろしい、と勝手に思っていたのです。

ところが、15年前、私は「ヴァインの祝福」という本を読んで、衝撃を受けました。最初に言いましたように、そのことを教区報にも書いたので、知っておられる方もいるでしょう。

「ヴァインの祝福」のヴァインとは、ぶどうの木のことです。

この本の中で衝撃的だったのは、ヨハネ15章2節の、「わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。」というところです。その本の解説によると、「父が取り除かれる」と訳された言葉は、「切り捨てる」というようなニュアンスではないらしいのです。

これは、「取り上げる」「背負う」「持ち上げる」という意味らしい。

たとえば、「弟子たちが五千人に食べさせた後に食べ物の入った十二のかごを『取り上げた』という箇所が使われたり、クレネのシモンがキリストの十字架を無理やりに『背負わ』されたというところ。

また、バプテスマのヨハネがイエス様のことをこの世の罪を『取り除く』神の小羊と呼ぶ。という具合に使われていて、「切り落とす」などというのは、不適切な訳である、ということです。

「持ち上げる」というのは、ぶどう園の農夫が前かがみになって、枝を持ち上げるということらしい。このヴァインの祝福の著者は、アメリカ人ですが、カリフォルニアでぶどうを栽培している人から、話を聞いたことがあるそうです。

その農夫は、ぶどう栽培者の生活について説明してくれました。何時間もぶどう園を歩き回り、ぶどうの手入れをし、実が成熟していくのをよく見て、収穫を始めるのに一番適した日を待つ。

「生えたばかりの枝というのは、そのままにしておくと垂れ下がり、地面に沿って伸びるものです」
「しかし、地面を這っているうちは実を結ばないのです。枝が地面を這っていると、葉が土にまみれます。雨が降ると泥だらけになり、うどん粉病にかかります。枝は病気になって使い物にならなくなるのです」

こう言うので、著者は質問しました。

「そうになったらどうするのですか？切り取って捨ててしまうのですか？」と聞くと

「とんでもない！枝を捨てるなんてもったいなくてできません。私たちは水の入ったバケツを持って歩き回り、そのような枝を探します。その枝を持ち上げて、よく洗うのです。それからつる棚に巻きつけるか結びつけます。すると間もなく元気よく育っていくのですよ。」

ここで、農夫は、病気の枝を切り捨てるのではなく、ていねいに、葉についた土をバケツの水で洗い流し、元気にする、という大変優しい存在であること。葉についた土は、私たちの罪みたいなもので、それがあから捨ててしまうのではなく、それを洗い流して、元気にしてくれる、配慮のある神様にたとえられることを、著者はわかったと言うのです。

今日の福音書は、イエス様が十字架に架けられる前の晩の出来事です。最後の晩餐をし、弟子たちの足を洗ったイエス様は、逮捕される前に、ぶどう園へ行って、いかに父なる神様がそれぞれの枝に配慮してくださっているかを、ぶどうの枝を手にとって、説明されたのではないか。

だから、ここでイエス様は、『神様という方はこのような優しい配慮を弟子たちひとり一人にされていることを忘れるな。』と言っておられるのでしょ。

これがわかると、父なる神様への信頼も深まります。そして、『あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。』（ルカ 6 :

36）と言われるイエス様の言葉も素直に受け入れられるように思います。

さて、それでは、泥まみれになったぶどうのツルを、水を使って、きれいに洗い流し、ツルが元気になって、たくさんの実をつけるようになる、とはどういう仕事をするように勧めておられるのでしょうか。

わたしたちみんながぶどうの栽培をするわけではありませんから、それぞれの現場で、人々が、もっといろんな束縛から解放されて、楽しめる社会をつくる、ということかもしれません。

いちばん身近な例で考えてみましょう。私たちの教会の礼拝堂は、どこも固い木でできた椅子に座って礼拝しています。先日もらった信徒の友に掲載されていた、DVDで映画会をしている四国の日本基督教団の教会も礼拝堂の椅子で、長い映画の時間を見ているようです。でも、それはちょっと辛いのではないかと私は思うようになってきました。

映画館の椅子というのは、コンサートホールと同じように、クッションの効いたソファのような椅子です。ところが、10数年前、シンガポールで友人の結婚式に出席した時も、似たようなホールの座席でした。ゆったりと座って、長時間いても楽しく過ごせるようになっているのです。

そして、数年前、神戸にあるユダヤ教の礼拝堂で、2時間以上の長い礼拝に出ましたが、やはりソファのような柔らかい椅子なんですね。

すぐにこの教会の礼拝堂の椅子をソファに換えてください、とは言いませんが、私たちの普段の生活でも何か工夫はできないものでしょうか。

どうも教会というところは、「教える会」と書いてしまって、修行のイメージが強すぎるように思います。

私たちは、神様との交わりに、喜びとか快適さ、解放感を味わえる方がいいのではないかと。苦しい苦行の礼拝、というのは、ちょっと違う。ぶどう園の農夫がブドウの枝を元気にするように、私たちも、人々を元気にするようなことを、礼拝でも、自分の普段の生活でも心がけたいと思います。